

認識概念に關する或考察

——ラスク認識論の一斷面——

島 崎 得 道

—

知る wissen とか認識する erkennen とかいうことは如何なることであるか。ラスクはその Die Logik der Philosophie und die Kategorienlehre. 1911 に於いて、認識の教説 Erkenntnislehre は意味の教説 Sinnlehre の主觀の側に於ける對應的相關者 Subjektskorrelat の論でなければならぬと云つて居る。或ものを知る若しくは認識するとは、そのものを質料として之を或何等かの範疇形式で抱く又は包み圍む (umfassen) ことと考へられる、換言すれば、そのものに就いての或理論的意味 theoretischer Sinn を體驗して之を自分の前に有つこと (vor sich haben) と考へられる。かくて「認識する」と「Erkennen」は、唯單に所謂先驗的「認識形式」transzendente „Erkenntnisformen“ の實現場所 Realisierungsstätte 即ち論理的形式内實の實現場所の名前たるに過ぎないとも考へられると同時に、それは或認識質料を或範疇的認識形式に依つて取り圍み包み込む umschliessen といふ構造を有するのである。即ち認識とは、或ものを質料として、それに就いての或意味形象を有つことである。この場合、その或ものは認識の質料となり、之を或意味形式で包み覆うて何等かの意味形象が出来、この意味形象を謂はゞ有つことにより或もの(質料)に就いての認識が成立するのである。

ところでかくして認識せられたもの das Erkenntnis は質料である。即ち認識されるのは質料であつて、この質料を包む意味形式そのものは謂は、唯體驗されるだけ gleichsam bloss erlebt で、その限り形式自身はその場合ラスクの所謂論理的に裸か logisch nackt の状態にあるのである。従つてこの場合形式は認識されるのではないと云はなければならぬ。

右の如く、ものを認識するとは飽くまで「單にそのものを範疇的に包んで現前せしめること」(Bloss das kategorial unkleidet vor sich Haben)であつて、かく認識するとは何等かの理論的意味に對する振舞 Verhalten zum theoretischen Sinn であると云ひながら、その場合認識されるのは實はその理論的意味ではなくして單にその意味の質料だけである——その理論的意味の形式の體驗を通してその形式に於いてある質料が認識的に把握されるのである。而もかゝる質料の把握は反對に亦決して直接的把握即ち體驗ではない。體驗されるのはむしろ意味の形式だけであつて質料ではない。質料はかゝる形式の體驗(直接的把握)を通し間接的に、即ちかゝる形式に於いてあり、かゝる形式に依つて包み圍まれ抱き被はれて居るものとして把握せられる。それが即ち質料が認識せられるといふことに外ならない。

ものを認識するとはそのもの(質料)に就いて何ごとか即ち或意味形象を捉らへ持つて、之を意識に現前せしめる(vor sich haben)ことであると考へられるが、この場合直接把握せられる即ち體驗されるのは、そのもの(質料)自身でもなければ、そのものに就いての或意味形象自體即ち事柄そのものでもない、むしろ事柄即ち意味の形式だけである。もの即ち質料はこの形式に於いてあるものとして、従つてこの形式に包まれ被ひ圍まれながらこの形式を介し、この形式の體驗(直接把握)を通して把握される、即ち形式を介し形式の體驗を通して謂は、媒介的即ち間接的 vermittelt d. h. mittelbar に把握されるのである。而してそのもの(質料)に就いての或事柄即ち意味そのものは、この場合嚴密にはそれが體驗されるのでもなければ、それが認識されるのでもないと云へる。體驗されるのは意味の形式だけであり、認識されるのは意味の質料であるからである。然らば事柄そのもの即ち意味自體はどうされて居る

であらうか。之を捉らへるとはどう捉らへることであらうか。その捉らへ方と差し當り認識の捉らへ方とどう異りどう關係するであらうか。

勿論認識は理論的意味に對する或振舞若しくは態度 *Verhalten zum theoretischen Sinn* ではない。「然しその認識せられるのは理論的意味ではなくして唯その意味の質料であり」(S. 81) 而も認識するとはそれを「唯範疇的に包み覆うて現前せしめること」に外ならないとするならば、理論的意味そのものは、今の場合認識的に捉らへられる即ち認識の質料となるのではないことは明らかである。この場合理論的意味そのものは、認識の客體 *Erkenntnisobjekt* とはされても、認識の質料 *Erkenntnismaterial* とされるのではないからである。即ちこの場合認識は理論的意味に對して或態度はとる、即ち意識の客體にはするが、之を認識し若しくは之に就いて認識するのではない、即ち之を認識の質料(材料)にするのではないのである。認識の質料となるは、この場合飽くまで理論的意味の意味質料であつて、理論的意味そのものではないのである。

一體「何かを認識する」*etwas erkennen* と云ふことには二つの意義が重なり合つて居つて(*doppeltdeutig*)それは幾分曖昧な所のある言ひ方である。即ちその「何か」*etwas* を認識客體 *Erkenntnisobjekt* と見ることゝ出来るし、認識質料 *Erkenntnismaterial* と見ることゝ出来る、その何れであるか明らかでない、或はその両方であるとも見られるからである。而も何かを認識の客體となることゝ、認識の質料となることゝは、決して同じでないところか、兩者は飽くまではつきり區別されなければならないのである。

認識に於いては何ものかに就いて何ごとかを捉らへられる、即ちそのものに就いての何等かの理論的意味が把握せられると考へられて居るが、理論的意味が認識に於いて把握せられるとは、それが唯認識の客體となる *Objektwerdung* といふ意味に於ける内在的となる *Immanentwerdung* と云ふことであつて、決してそれが認識せられる *Erkenntniswerdung* といふ意味に於ける認識の質料となることではないのである。何ものかに就いて何ごとかを認識せられる即

ちそのものゝこと、が知られるとは、そのこと、が認識の客體となり認識體驗に内在的になるといふだけのことであつて、決して必ずしもそのことに就いて、若しくはそのことに關して、何かゞ認識せられるのではない、即ちそのことが認識の質料にされるのではないのである。或ものゝ認識即ち或ものに就いて或こと（或理論的意味）が認識に於いて捉らへられるといふ時、その或こと即ち理論的意味は、認識の客體とはなるが認識の質料（材料）となるのではない。認識の質料はこの場合或ものであつて或ことではないからである。而もこの或ものはその或ことのかゝはる當のものであり、その或ことゝはこの或ものにかゝはる所の或事柄、即ちこの或ものを質料とする或理論的意味（即ち眞理）である。かくて或ものゝ認識に於いて捉らへられる眞理、即ちそのものに關する理論的意味は、今の場合認識の客體としては把握せられるけれども、認識の質料として把握せられるのではないのである。この間の區別、即ち認識の質料として捉らへられるといふことゝ認識の客體として捉らへられるといふことゝの相異、並びにかくして捉らへられたものゝ認識に於ける在り方の相異、若しくは認識のそれ等のものに對する對し方の相異關係等を明らかに看て取ることの重要さは、所謂存在認識 *Seinserkennnis* 即ち科學的認識の問題から轉じて、妥當認識 *Geltungserkennnis* 即ち哲學的認識の問題の研究に移る際に、更に倍加することが豫想せられるのである。この事を一層鮮明な形で浮び上らされる爲に、今こゝで所謂眞理の認識に就いて少しく述べて見たい。

二

吾々は普通に而も極めて無造作に、誰でもよく「眞理を認識する」といふことをいふ。然し考へて見るとこの言葉又は言ひ表はし方に存する一種の曖昧さ若しくは複義性即ち二重の意義のあること *Doppeldeutigkeit* に氣付いて居る人は案外少いものではあるまいか。この場合「眞理」が理論的意味なることは云ふまでもないとして、その眞理若しくは理論的意味を「認識する」といふ時、それはどういふ風に認識的に捉らへられ、どう認識と關係し、従つて認識

に對しどういふ在り方どういふ關係の仕方をするのであるか。言葉を換へて云へば、この場合、眞理又は理論的意味は、認識の質料とされるのであるか、それとも認識の客體とされるのであるか。

普通に吾々が例へば「學問の目的は眞理を認識するにある」と云つたりする様な場合、果してどちらであらうか。之は勿論人によつて又場合によつて多少考へ方が違ふかも知れないが、私の見る所では多くはかゝる場合、その眞理は認識の質料とされるのでなくして認識の客體とされて居るのであると思ふ。又かゝる意味に於いてその眞理に關係し之を「把握」することが所謂「眞理の認識」であると考へられて居ると思ふ。

なぜかといふに、多くの場合、殊に常識や科學的知識の立場に立つ場合などでは、眞理とは「何かに就いての眞理」であつて、即ち例へば科學が眞理の認識を任とするといふ様な場合のそれは、何か實在するもの或は存在するものに就いての或事柄を意味し、——それが實在認識又は存在認識と稱せられる所以——之を捉らへ之を體認悟得することが謂はゞ科學の任務であるといふ風に考へられて居るが常であると思はれるからである。

反之吾々はしばしば亦眞理に就いて考へ、眞理のことを即ち眞理に關する、或事柄を認識したり論じたりする。而もその場合にも吾々は平氣で無造作に、それを唯「眞理を考へる」と云つたり、「眞理を認識する」と云つたりする。併しこの場合眞理が思惟或は認識に對する關係は、さきに「科學は眞理を認識するものだ」と云つたりする場合の眞理とその認識との關係とは、全く違ふものであることに人は充分氣付いて居るであらうか。

惟ふに眞理の事を考へ眞理に就いて認識するのは、最早眞理を單に思惟や認識の客體として取扱ふのではなくして、それを思惟や認識の質料として取扱ふのである。従つてそれは最早常識や科學のなす所ではなくして、哲學の任とする所即ち哲學的認識である。即ち單に眞理をでなくして——嚴密に云つて——眞理に就いて認識し考察し、従つて單に眞理を考へるのみならず、眞理に就いて考へ、眞理の事を考へ思索するのは、本來既に眞理の常識的又は科學的把握の仕方、即ちそれをその認識の客體として把握する把握の仕方とは異つて、眞理を認識の質料（材料）として

之に就いて之に關しての或事柄——謂はゞ高次の眞理——を把握して體認得せむとするもの、言ひ得べくんばこの高次の眞理を認識客體として把握せんが爲に、普通の謂はゞ低次の眞理をその認識の素材として質料として、それに就いての或認識を得んとするが哲學的認識の目的であり任務である。

故に同じく「眞理を認識する」と云つても、眞理を科學的に認識するか哲學的に認識するかの相異がこゝに見られる。前者は眞理を客體として把握認識し、後者は眞理を質料として把握認識する。哲學的認識が科學的認識に比して謂はゞ次元が高いと稱せられ——高い低いをいふには多少の差し障りがあるとして之を避けるべきであるならば——少くとも次元が異ると稱せられる所以である。

哲學も學であり認識であるから、同じく眞理を客體とすると云つても、その眞理は謂はゞ高次の眞理——他或は自づからの眞理に就いての眞理——即ち所謂「眞理の眞理」である。言ひ換へればその眞理は第二次的の眞理、即ち他の何等かの眞理に就いての眞理である。尤もかゝる哲學的眞理は時として自己の眞理に就いての眞理であることも勿論可能であり、謂はゞかゝる第三次第四次等の高次の眞理を自己の中に含んだ一般的高次の眞理（所謂高次の眞理一般）をその認識の客體となし、而も更にかゝる眞理自身をも、従つて如何なる眞理をも、自己の認識の質料ともなし得る所に、哲學的認識の、普通の科學的認識又は常識的認識と其の本質を異にする所以が存し得ると云へるのである。但しこゝで普通の常識や科學的認識などに於いても既に亦、自己の客體として把握した眞理に就いての、何等か之を質料とする高次の眞理の認識が副次的又は含蓄的に含まれ、若しくは潜勢的に成立して居ると見るべきであるかどうかの問題には今は觸れずに置かう。唯少くとも哲學的認識若しくは哲學的眞理に於いては、かゝることが顯在的若しくは現勢的に、即ち自覺的主題的に取り上げられ反省せられて居ることだけは確かであると思ふ。従つてそこに常識或は科學的認識若しくは眞理と、哲學的のそれとの間に一應の區別を見出すことは、あながち不都合ではあるまいと思ふからである。

要之或物若しくは或事を、認識の客體として之に關係するか、それとも認識の質料として之に關係するかは、極めて重大且つ根本的に異つた關係の仕方であつて、眞理に就いて之を云へば、謂はゞ科學（的認識）と哲學（的認識）との相異、従つて科學的眞理と哲學的眞理との相異、をそこに見ることの出来る誠に重要な區別が存することを看取しなければならぬと思はれるのである。

因に卑見によれば、或物、或は或事は、即ち如何なる物でも如何なる事でも、従つて凡ての事物は何でも、認識の質料にはなされ得るけれども、事物は何でも認識の客體にされ得るとは限らないと思はれる。端的に云つて私は認識の客體にされるのは、常に物（狹義の）ではなくして事であると思ふのである。そう言ひ切り度い。勿論所謂物と事との區別や關係等に就いては色々厄介な問題があり、言葉或は概念としても何を物となし何を事とするかには、劃定或は表現の上でも輕々に取扱ひ難き、種々面倒な問題が絡んで居て、簡単に之を私の様に一刀兩斷的に割り切つてしまふ譯にいかない節もあるかも知れないけれども、私は之を多少大膽に過ぎ所謂盲蛇に怖ぢずの誹りを受けるを覺悟の上で、所謂もの、こととの區別を、今は大體次の様な言葉の使ひ方の上のニュアンスの違ひで、凡そ彷彿せしめることが出来るかと考へる者である。

（註） 出隆、「もの」と「こと」によせて（空點房雜記所載）参照。出氏の所説に全面賛成する譯には行かないが、示唆する所あり、仲々面白い隨筆である。

かいつまんで之を云へば、もの、こととの區別は、丁度獨逸語などで「存在するもの」das Seiende と「存在すること」das Sein とを區別出来る様に、例へば「赤いもの」と「赤いこと」（「赤い」といふこと）即ち「赤くつてふこと」との相異、或は「美しいもの」と「美しいこと」との相異、等々を考へれば充分であると思ふ。進んで言ふならば、例へば之を更にリッケルト等の用語法に従つて（Rickert, Gegenstand der Erkenntnis）、存在と意味又は價值との區別になぞらへて考へることも出来るであらうし、或はマイノングの用語例に倣つて（Meinong, Über Annahmen）、Objekt

と Objektiv との區別に當て稽めて考へて見ることも出来るかと思ふ。但し例へばマイノングによれば、Objekt は表象出来るけれども、Objektiv は表象出来ないと思はれて居る様であるけれども、私の見解では Objektiv も表象出来るのではないかと思ふ。即ち、こゝも廣義のもの、一種であり、一部であつて、凡てのものは、(こゝもものも一緒に含めて) 皆表象は出来る。Objektiv もその限りでは廣義の Objekt の一種であるに過ぎない。但凡ての Objektiv は廣義の Objekt の中に入れることは出来ても、さりとて逆に凡ての Objekt が悉く Objektiv になり得る譯ではないのである。或種の即ち狹義の Objekt は、如何にしても Objektiv にはなり得ない。或種のものはどうしても「こと」となり得ないと同様である。アリストテレスは主語となつて述語とならないものが眞に實體と稱せらるべきものであると云つて居るが、狹義の Objekt 即ち如何にするも Objektiv たり得ないもの、従つて私の所謂「どうして」と「なり得ないもの」(狹義のもの)は、謂はゞ實體的なものとして、自らは他のもの、述語たり得ない主語的なものである。かくしても、中には確かに主語となつて述語とならないものがある。かゝるものは何處までも「こと」であつて、こゝにはならない、アリストテレス流に實體的なものである。マイノングの Objekt となつて Objektiv とならないものも、之を言ひ換へれば、主語的なもの實體的なものであつて、所謂 Annahme や Urteil の内容にはならないもの、即ちそれを *Dab-satz* の形で言ひ表はすことの出来ないものである。それを「何々であるもの」とは言ひ表はし得ても、「何々であること」とは言ひ表はし得ないものである。Objektiv は常に言語的には *Dab-satz* に依つて表はされる様な或事柄、或事態 (*Sachverhalt*—*Stumpf, Erscheinung und psychische Funktionen*) 従つて或意味形象 *Sinngebilde* であつて、單なる物 *Ding* とは異なる、即ち本來は述語的なものである。

事は物(廣義の)の一種であつても、その限り事は結局物だといふことは出来ても、反對に物が凡て事になり得るとは限らない、物を事の一種と考へることは出来ないのである。否或種の物は如何にするも之を事と考へることは出来ない。例へば「赤い物」は何等の意味に於いても結局「赤い事」「赤いてふこと」にはならない。「赤いもの」と

「赤いこと」とははつきり區別することが出来るのである。こゝに凡ゆるもの即ち所謂「考へ得るもの一般」das Denkbare überhaupt の中から物 Ding と區別せられた事 (Sache, Tatsache, Tatbestand, Sachverhalt, Bewandnis, usw.) が考へられてよい。Objekt の中から Objektiv を取出して區別するものが出来ると思ふ。「もの」(狭義の) と異なる「こと」を考へることが出来ると思ふのである。而して「こと」は即ち事柄であり、それは即ち何等かの理論的意味であると考へなければならぬのである。

かくして物と區別せられた事、即ち事柄のみ、従つて理論的意味だけが認識の質料ならぬ認識の客體となり得る唯一のものであると云はなければならぬ。換言すればものも、ことも、廣義のものとしては何れも認識の質料となることは出来るけれども、認識の客體たり得るは、ものでなくしてひとりことだけでなければならぬ。ことゝなり得ないもの、即ち本來の若しくは狭義のもの、従つてもと／＼ものたるより外なき所ものは、認識の質料たり得ても決して認識の客體たることは絶対に出来ないのである。こゝにも、こととの嚴然たる區別が裏から、即ち結果的にも見られるのではあるまいか。

一般に「もの」は有り (sein) 「こと」は妥當する (seltan) と考へられる。本來のもの、即ち唯ものたるだけのものたる狭義のものは、結局唯質料たり得るだけのもの即ちラックスの所謂 Nur-od. Urmaterial に當るものであり、反之「こと」は本來妥當なるもの、即ち形式的性格のもの、意味的性格のものと考へることが出来る、従つて述語的である。

認識の質料には如何なるものも成り得るけれども、認識の客體には唯ことだけ即ち事柄のみが、従つて意味だけになるのである。リッケルトが「認識の對象」は存在でなく意味である、當爲である、價值であると唱へる所以もこゝに存すると思はれる。彼が認識の對象と稱するものが、今の場合吾々が認識の客體と呼んで居るものに略該當すると考へて大過ないであらう。

右の様に考へて來ると、普通日本語で吾々は「ものを認識する」と云つて居るが、實際認識されるのはむしろもの（狹義の）でなくして却つてことではあるまいかといふ様な氣もする。詳しくは、ものに就いての或こと即ちものことが認識されるのだと考へるべきであらうか。ものは認識の質料であり、ことは認識の客體であるからである。或質料に關する或理論的意味（眞理）が認識客體として意識に現前せしめられる所に「もの、認識」も成立するのである。かゝる事態を簡單の爲に「ものを認識する」と吾々は稱するのであると考へることが出來よう。之は單に言ひ表はし方だけの問題でなくして、同時に考へ方そのもの、問題にも係はる重要な事柄を含んで居ると考へられるが故に最少しその追求を續けて行つて見よう。

抑も認識に於いては理論的意味（こと）が捉らへられると云ふが、意味が認識に於いて捉らへられる即ち意識に現し内在的になるとは如何なることであらうか。理論的意味が内在的になる *Inmanentverdung* とは唯單に客體になること *Objektverdung* であつて、その意味が認識せられて *als Erkenntverdung des Sinnes* 把握せられるのではないことに就いては既に前にも觸れて置いたし、上來の考察でものとこととの相異、認識の質料と認識の客體との區別に關して述べたことを想ひ起して貰へば充分であらう。尤も是等兩者の關係、在り方の相異などの問題に就いては、未だ一般に充分論究されて居ないから、不明の儘に残されて居る部分も多いであらうけれども、兎に角理論的意味が認識の客體になるといふこと、認識の質料になること、は、全然別のことであり明らかに區別されなければならぬことだけは最早縷説を要しないと思ふ。そして吾々は認識せられるといふこと *Erkenntverdung* を専ら認識の質料とされるといふ意味に限定して用ひる様にしたいことを私はこゝに提案するものである。

故に例へば所謂實在認識 *Wirklichkeitserkennen* の際に認識されるのは何かと云へば、實在（性） *Wirklichkeit* で

はなくして實在するもの *das Wirkliche* 即ち實在性に於いて在る「感性的なるもの」*das Sinnliche* だといふことになる。即ち所謂實在認識に於いては感性的なるものが認識せられるのである。詳しく言へば實在認識に於いては、感性的なるものを質料としてそれに就いて、その實在すること（實在性）が認識客體として把握せられる即ち認識されるのである。

然らば更に右の如き認識質料と認識客體とは各々如何なる仕方で「把握」せられ、且つ兩者はどう關係連絡して認識を成立せしめるのであるか。又かくして成立する「もの、認識」はその同じもの、「體驗」或は「直観」とどう關係し如何に異なるのであるか。

もの、認識ともの、體驗或は直観とを區別する最も重要且つ根本的標幟の一つは、體驗或は直観が、ものを直接或は無媒介に (*unmittelbar d. h. unvermittelt*) 即ちそのものをちかに從つて裸かの儘で (*Laस्क* の所謂 *nackt* に) 捉らへて之に關係するに對し、認識は、ものを間接的或は媒介的に (*mittelbar d. h. vermittelt*) 即ちそれをちかにでなく、從つて裸かの儘にでなく、何等かの形式に包み込み (*umschliessen*) 形式の衣を着せて (*umkleiden*)、その形式に於いてありその形式を通して見られる限りに於いて、謂はゞ斜めに (*in obliquo*) 又は間接的に之を捉らへるに關係する所に存する。簡単に言ふならば、ものを把握しものに關係するに、之を包む意味形式を媒介にするかしないかど、認識と體驗又は直観との根本的に異なる點である。而して認識はものを捉らへるに、之を何等かの意味形式の中に包み込み、その意味形式の體驗を通して、その意味形式の中にある質料として之を捉らへるに關係する。即ち必ず何等かの形式を媒介にしてその形式の衣を着せて之を捉らへるに關係する所に、認識の特色がある。認識的把握又は關係の仕方が、もの、「媒介的」「間接的」「斜めの」把握又は關係の仕方であると云はれる所以である。反之ものを何等の形式若しくは衣を着せず、ちかに裸かの儘で即ち無媒介に直接的に把握し之に關係する仕方を體驗若しくは直観と稱するのである。

ところでこゝに注意しなければならないのは、體驗又は直観されたものは、それだけではそのものに就いて吾々は何等知る所がないといふことである。直観はされるが知られない、體驗はされるが認識せられないといふ事態が存するのである。

然らば認識と、體驗或は直観とは、如何なる關係にあるであらうか。抑も認識に於ける形式（意味形式）の在り方は如何であらうか。その形式が認識的把握を媒介する仕方如何が検討されなければならないであらう。

認識は要するに形式の體驗或は直観を媒介とする所の事物（質料）の間接的把握と考へられる。詳言すればその事物を質料とする或意味形象の形式の體驗を通して、その意味形象そのものを客體として意識の前に持ちながらその事物に間接的に關係することが、その事物を認識すること、即ちその事物を認識的に捉らへその事物に認識的に關係することである。従つて認識にはその認識の客體たる或理論的意味形象の形式を體驗若しくは直観することが絶対に必要である。かゝる形式の體驗なくして認識は成立しない。故に認識の第一の必要條件としては認識客體の形式の體驗を先づ擧げなければならぬであらう。ところで認識客體の形式の體驗、即ち或理論的意味形象の意味形式を體驗するとは如何なることであり、如何にして可能であらうか。またそれとその意味形象の質料（従つて認識の質料）即ち事物そのものとは如何なる關係にあるであらうか。従つてその事物を間接的媒介的に即ち認識的に捉らへるとは如何なることになるであらうか。

既に度々述べた様に、事物を認識するとは、その事物を質料とする何等かの理論的意味形象を意識に現前せしめて之を客體として持つことではなければならないが、かゝることが如何にして出来るかといふに、それは吾々がその意味形象の形式を體驗して、かゝる體驗を通してその意味形象の質料即ち事物に間接的に觸れ、事物を謂はゞ斜めに *obliquo* 即ち媒介的に捉らへて之に關係するからである。それが即ちその事物に就いて何事かを認識したといふことに外ならないのである。而もこの場合勿論理論的意味形象の形式は、體驗せられるだけ、即ち直接的に捉らへられ無

媒介に捉らへられ、従つてラスクの所謂論理的に裸かの儘で捉らへられるのであつて、それに就いて吾々は何事も知らない、即ちそれは認識せられないのである。——それ即ちこの形式そのものを認識する爲には、吾々は更にこの形式を質料の位置に据えて、その質料（即ち該形式）に就いての或理論的意味形象（さきの意味形象に比すれば謂はゞ高次の意味形象ともいふべきもの）の形式の體驗、即ち所謂「形式の形式」の體驗を必要とし、この體驗を通して、この形式に於いて在る右の高次の理論的意味形象を意識に現前せしめて之を客體として持たなければならぬのである。かゝる高次の意味形象の（形式の）體驗即ち所謂「形式の形式」の體驗に依るにあらざれば、一般に「形式」は認識せられない。認識せられない限り吾々はそれに就いて何も知る所がない、否知る所がないといふことすらも實は（哲學的に反省しない限り）普通に吾々は自覺しないのであつて、それ程「形式」に關しては一般に吾々は無知であると云はなければならぬのである。

かゝる無知的形式の把握（直接體驗）を通して意味質料即ち事物は知られるのである。認識が一般に謂はゞ一種の「無知の知」と云はれる所以でもあらうか。尤もこの場合の無知の知は、所謂無知を知る知ではなくして、無知に依る知、不識を以てする認識とでもいふべきものであらう。而してこの無知不識こそが實はものゝ最も直接的でちかの把握即ち赤裸々 (nackt) な状態での把握なる所に、一種の皮肉若しくはパラドックスが看取せられないこともないであらう。體驗は必ずしも認識でないと考へられるからである。況んや認識も亦或種の體驗であると考へらるべきであるとするは尙更ではあるまいか。或はこの事をヘーゲル流に云つて、體驗に依つて把握されたものは *bekannt* であるが *erkennen* されて居ないと考へることも出来るであらうし、若しくはリッケルト流にそれを *bewusst* であるが *gewusst* ではないと言ひ表はすことも出来るかも知れない。

それは兎に角として、認識に於いては何等かの理論的意味が捉らへられるといふが、意味が認識に於いて捉らへられる即ち内在的になる (*Immanentwerdung*) とは客體になること (*Objektwerdung*) であつて、その意味が認識せ

られて把握せられるのではないことは既に述べた通りである。ものが認識せられるには、そのものに就いての何等かの理論的意味形象が意識に内在的になり、かくしてそれが吾々即ち認識主觀の客體となることが先づ第一に必要である。かくして内在的になり客體になつた所の理論的意味形象を自己の前に持ち（vor sich haben）ながら若しくは持つことに依つて、従つて之を意識に現前せしめて、その意味形象の質料、即ちそのものに意識が關係することが、とりもなはず吾々がそのものを認識すること即ちそのものを認識的に把握することに外ならないと考へられる。

ところで或ものを認識する爲にそのものに就いての或理論的意味形象を自己の前に持つ、即ちそれが吾々（認識主觀）の客體となり意識に内在的になるとは更にどういふ事柄であり又如何にしてそれが可能であらうか。

勿論意味が内在的になるとか客體となるとかいふことにも色々々に考へられる面があり色々の解釋が加へられるであらう。併し今はそれが認識されるとは異つた仕方で意識にもち來たされ吾々に「與へ」られる與へられ方が問題である。従つてそれに對する吾々の關係の仕方、その捉らへ方が問題であつて、その仕方が認識の捉らへ方、關係の仕方とどう異りどう關係するか問題である。

一般にものを認識する際には即ちものが認識されるとは、そのものが認識的に捉らへられると共に——といふよりもそのものが認識的に捉らへられるといふことの中に——そのものに就いての或理論的意味形象が吾々に内在的となり吾々の客體となつて與へられるといふことが含意せられて居なければならぬ。而もかく内在的となり客體となる意味形象は、それが認識せられる譯でないとするれば、それはどう把握せられ、従つてそれに吾々は如何なる仕方で關係して居るのであらうか。

惟ふに右の如き意味形象の、認識とは異つた與へられ方若しくは把握のされ方とは、之を吾々は體驗若しくは直觀（として）の與へられ方又は把握のされ方、即ちそれは認識されるのでなくして、體驗され若しくは直觀されるのである、といふ風に云ふことが出来るのではあるまいか。即ちものゝ認識に於いては、ものは認識されるのであるが、

その場合ものに就いての意味は、體驗され直観されるだけである。而して體驗或は直観とは、何かを直接に無媒介に、即ち、裸かの儘で捉らへて之に關係しその儘それを意識に現前せしめることであると考えられる。ものを認識するのではなくして、ものを體驗若しくは直観するとは、要するに、ものを論理的に裸かの儘で確かに意識に現前せしめること、従つてそのもの、有りの儘を直接に捉らへて之に關係することを意味する。

尤も或物を體驗すると云つた場合、その或物が體驗の中に溶け込む場合と然らざる場合とがあるであらう。例へば作用が體驗される場合は前者の例であり、事物を體驗する場合は必ずしもさうでない。事物は體驗されてもそれは體驗の客體たるだけ、即ち體驗に内在的になるだけであつて、事物が體驗そのものになる譯ではない。たとひ體驗或は直観を人はしばしば主客合一又は主客一枚の境涯として謂はゞ物心一如といった様な記述はするにしても、主體（主観）と客體とは唯確かに相接して居るといふだけであつて、主體が客體になり客體が主體となるといふのではない。唯その區別が實際にはつけ難い程相接し之を隔てるものが存しないといふに過ぎないのである。體驗も意識である限り、それに内在的になりその客體となるとは、飽くまで志向的内在であり志向的對象となることである。

意味が體驗若しくは直観されるのも同様である。それは唯意識に内在的になり意識の客體となるだけであつて、それが意識の流れの中に溶け込んでしまつて姿を没し、その流れの中に見失はれてしまふといふが如くではないと思ふ。それは唯意識に於いて、即ち體驗若しくは直観に於いて、裸かで捉らへられ、裸かに與へられるといふだけである。それが體驗若しくは直観されるといふことの本義であつて、簡単に云つて、もの、論理的裸かの儘の直接把握がもの、體驗若しくは直観であると言つて差支へないであらう。ものが直接無媒介に、即ち何等の衣や形式を着せられずに、論理的に裸の姿で確かにそのもの自體が意識に與へられ捉らへられる任方が、體驗若しくは直観と稱せられるもの外ならない。

そこで意味が直接無媒介に與へられ、それが論理的に裸かの儘確かに捉らへられ即ち體驗若しくは直観されて意識

に現前する際の状況を、更に詳しく検討して見ると、例へばかゝるものに對するフッサールなどの所謂現象學的考察による知見の如きものを參考にして、凡そ次の如きことが云はれるのではあるまいか。

四

抑も意味は意味形式と意味質料との要素から成り、而も意味が意味として、存在せずして妥當するのは、専らその意味形式の性格に負ふのである。意味形式は意味質料に對して向妥當 *hingelten* すると考へられ、そのことに依つて意味自身亦妥當性格を獲得する。意味形式の向妥當性格 *Hingeltungsscharakter* が其儘意味の妥當性格を成し、意味の妥當するは意味の形式に基づくのである。意味形式の形式性格 *Formcharakter* が所謂 *Hingeltungsscharakter* なるが故に、それに基づいて意味全體が妥當するものとなり、主觀に對してはそれが *entgegengehen* するのである。換言すれば意味に於いては、形式が質料に *hingelten* するが故に、又 *hingelten* することを通して、意味が主觀に *entgegengehen* する、即ち意味が總じて妥當するに至るのである。意味の意味たる所即ちその妥當性格は、一つに全く意味の形式に基づき、意味形式の意味質料に對する向妥當性格が意味全體に反映して、その儘意味そのもの、妥當性格を成し、之を主觀に對しては *entgegengehen* せしめるのである。

従つて意味の意味たる所即ち意味の内實は、その本質からすれば形式である。意味を體驗或は直觀するには、意味本質即ち形式を體驗或は直觀しなければならぬ。意味形式の體驗或は直觀に於いて *Hingeltung* が體驗され、*Hingeltung* の體驗はやがて意味全體の妥當の體驗として、意味が妥當するものとして意識に内在化されることとなり、意味が吾々に *entgegengehen* する即ち客體となつて現前するのである。

意味は體驗に於いては主觀に對する客體の位置をとり、意味自體としては、意識に内在しながらその形式の故に體驗を超えて質料に *hingelten* し、その質料を包んだ意味全體としては超越的に妥當するのである。内在的となつた意

味も、意味としては飽くまで超越的である。意味のかゝる超越的性格も、元を質せば意味形式の質料に對する *Hin-gelungscharakter* に由來するのであつて、その形式を體驗することに依つて意味が内在的となり體驗の客體となつたからとて、意味そのものは飽くまで超越的に妥當するもの、客觀的に存立するもの、として超時間的に成立するのである。

意味質料が時として、例へば存在的感性的なるものに就いての意味に於いての如く、時間的生滅變化的なるにも拘らず、意味形式はどこまでも如何なる意味に於いても、超時間的生不生滅的であつて、永遠無時間的に妥當するものである。それに依つて如何なる意味も、たとひ存在に關する意味でも、意味としてはそれは妥當するものであつて存在するものではない。従つてその意味が體驗されても、意味は飽くまで意味として妥當し超越的に存立しながら、意識に内在し體驗の客體となるに過ぎない。意味は體驗されたからとて、意味の本質たる妥當が存在になり超越が内在に化せられて、時間的生滅的なる體驗の謂はば成分 *Bestandteile* となるのではないのである。意識(體驗)に對する意味の内在は、所謂志向的内在 *intentionale Inexistenz* (Brentano) 即ち一種の超越的内在若しくは内在的超越であつて、飽くまで客體として主觀(主體)に對してあり、その主觀に *entgegengehen* するのである。そしてその *entgegengehen* する所以のものは、その意味の形式性格即ち意味形式の *Hingelungscharakter* に基づくのであつて、かゝる意味形式を體驗することがやがて、意味そのものを客體として把握し、之に主體的に關係することに外ならないのである。

右の如く意味内實が意味の本質上その形式に存し、形式を體驗することがやがて意味を體驗することであり、従つて意味體驗は形式體驗に於いて成立するとすれば、形式體驗は之を現象學的に見れば形式直觀に外ならぬが故に、意味は一般にフッサールの所謂範疇的直觀 *kategoriale Anschauung* (Husserl, *Logische Untersuchungen*, II 2. sechtes Kapitel) に於いて與へられ體驗せられると考へることが出来る。形式直觀就中範疇的直觀は所謂「高次の対象」*Gegenstände*

höherer Ordnung“ (a. a. O. S. 147) の直観として、内容直観即ち質料の直観とは類を異にし次元を異にする。意味は勿論形式と内容(質料)との両面を有し、形式は内容を包むものなるが故に、意味の直観は形式の直観に於いて成立すると云つても、その形式は所謂 *hingelen* するものとして、必然に自己を超えた或他のもの即ち質料を豫想し之に基底づけられて居る。意味直観は形式直観として此の如き質料に基底づけられた形式の直観、即ち所謂範疇的直観として謂はゞ基底づけられた作用 *fundierter Akt* の體驗として成立するのである。之を基底づけるものは勿論質料の直観である。併し質料の直観は意味直観に於いては、高次の直観(形式直観)の基底として存するだけで、謂はゞ斜に *in obliquo* 即ち形式直観を通し形式直観を介して直観され體驗されるだけである、形式に依つて *hingelen* される限りに於いて體驗されるのである。否意味直観に於いては、形式を満たす *erfüllen* 限りに於いての質料が、形式の直観と同時に直観され體驗されると考へられなければならないのである。然らずしてかゝる質料直観を抜きにした、單なる形式直観のみとしての意味直観は、謂はゞ一種の意味賦與的作用體驗 *das sinnverleihende Akterlebnis* であつても、眞の意味充實的作用體驗 *das sinnerfüllende Akterlebnis* 即ち具體的意味體驗とは言ひ難いであらう。たとひ抽象的意味體驗に於いてもその意味體驗は、謂はゞ暗黙のうちに、形式體驗の中に、即ち形式體驗と同時に、質料體驗の一部をでも、象徴的に含んで居ると考へるべきであらう。

以上の如くして意味直観或は意味體驗は結局形式直観であり形式體驗であると考へられるが、意味の形式直観即ち範疇的直観は、一般に意味の理念的抽象 *ideierende Abstraktion* の體驗即ち意味の一般化 *Generalisierung* の方向ならぬそれぞれの形式化 *Formalisierung* の方向に於いて體驗される直観ざるべきものたることはいふまでもあるまい。而もその形式化は内容即ち意味質料による充實を必要とし、意味形式は意味質料に *hingelen* しながら、その意味質料を自己の形式の中に包みとり抱き入れなければならないのである。かくて意味は形式による内容(質料)の構

成若しくは綜合統一と考へられ、意味形式と意味質料との抱合に於いて成立し、その體驗はとりもなほさずかゝる意味形成の體驗として、一種の意味賦與作用と意味充實作用との兩方の體驗を必要とするであらう。然し意味の本質は飽くまでその意味の形式にあり、即ち意味内質は結局その形式に存するが故に、形式直觀即ち所謂意味の範疇的直觀が意味體驗の主位を占めその *Priorität* を有すべき」とは云ふまでもないけれども、(意味直觀即ち範疇的直觀は廣義には意味充實作用の體驗をも含むけれども、狹義には意味賦與作用の體驗を主とするものであるといふことが出来よう) 併し亦意味質料に對する顧慮即ち質料直觀若しくは質料體驗の重要さに就いても吾々は之を忽せにしてはならない。意味形式は意味質料に依つて充實され結局之に *hingelien* しなければならぬものであるからである。形式は質料を、質料は形式を俟つて始めて意味を成し、かゝる意味が始めて「妥當」するものたることが出来るからである。——とはいふものゝ、意味の意味たる所意味の内質は飽くまで形式に存することに變りはない。たゞかゝる形式の體驗が質料體驗に基礎づけられた (*fundiert*) 體驗にならなければ具體的意味體驗とは云はれないと考へられるだけである。

元來意味の本質は妥當にある。凡ゆる意味に共通の唯一根本性格はその妥當といふことである。妥當しない意味は意味の名に値しない。意味は妥當することに依つて意味たるのである。而して此の如き意味の本質の基づく所は結局意味の形式であつて、即ち意味形式の *Hingelungsscharakter* の反映が意味の妥當であると考へなければならぬのである。

而も意味の形式の性格即ちその *Hingelungsscharakter* は、凡ての意味に於いて一つにして同、即ち唯一共通であつて、意味が意味と云はれる所以の本質即ちその妥當も、結局之に基づくことは繰り返し述べた通りである。従つて如何なる意味もそれが意味として體驗され直觀されるには、先づ以つてその唯一の意味本質たる同じ「妥當」が體驗され直觀される必要のあることは云ふまでもあるまい。それがやがてまた形式直觀であり、範疇的直觀に依つてな

されることも今は縷説を要しないであらう。ラスクが一般に意味的なるもの、従つて形式的なるもの、「領域範疇」を妥當と名づけたのも故なしとしないのである。

然しながら凡ゆる具體的個々の意味は決してこの唯一意味本質たる妥當だけから出來て居るのではない。否むしろ凡ゆる具體的意味は、たとひ最も抽象的意味たる例へば同一といふ如き意味でも、この唯一共通な意味本質「妥當」の基づく意味形式が、その形式の *hingehen* する意味質料から逆に規制 *restingieren* せられ意味充實を受け、即ちそれに依つて特殊化限定せられ分化個別化せられて、始めて眞に個々の具體的特殊的意味となつて妥當するのである。

もと／＼意味はその形式が何等かの意味質料からの意義負荷 *Bedeutungsbelastung* を受けなければ眞の意味として具體化しない。具體的意味の形式には常に何等かの意義規定性 *Bedeutungsbestimmtheit* 即ちその意味形式が正にその意味質料に *hingehen* し適合する形式たることの内實を示し、従つてその形式が正にその内容(質料)を意味しその内容(質料)を意味的に捉らへるものたることを明示するに足る何等かの意義規定性を有し、その規定性に従つて意味は具體化し個別化し分化して夫々の意味となるのである。而も此の如き意義規定性は、本來意味形式自身の中には存せずして、實はそれが規定すべき意味質料の謂はゞ形式からの規定の反應として逆に質料の側から與へられ、むしろ質料の側からの逆規定として形式が受け取り反映する所のものである。即ち凡ゆる意味に於ける意味形式の内實たる意義規定性即ち形式の或一定の意義は、實は本來その意味形式自身のものではなくして却つて意味質料から得たるもの、質料自身の形式による規定の謂はゞ反作用若しくは逆反應として受ける逆規定に基づくのである。之をラスクに従つて質料の側の意義規定的契機 *bedeutungsbestimmendes Moment* (*Task, Lehre von Urteil, 1912, S. 102*) と名づけることも出來よう。

尤もこの意義規定的契機が直ちに個々の質料そのものに屬するにあらずして、一定の質料の類的なものに屬すると

考へられる限り (A. a. O. S. 103)、それは矢張り質料に對する形式からの規定の反應として、形式の側から見られた限りの質料からの逆規定、即ち一種の形式による質料の自己規定若しくは質料の形式による自己反映と見られないこともない。形式は質料に比し常に類的なものと考へられるからである。併しさう云へば形式の側の意義規定性に就いても對應的に略同様のことが云はれるのであつて、即ち形式に於ける意義規定性は質料による形式の自己規定若しくは質料からする形式の反照的逆規定とも考へられ得るのである。何れにしてもこゝでは形式と質料とが交互規定の面を有ち、相互媒介的に、従つて恐らくは一種の辯證法的關係に於いて、質料の特殊と形式の一般、質料の個別と形式の普遍とが、規定し合ひ規定され合つて、全體の具體的意味統一を成して居ると見るべきであるとも考へられるのである。

要するに個々の具體的意味は形式をその意味内實としながら、形式の意義規定性は質料からの意義規定的契機を反映して、形式そのものが質料からの一定の規制 *Restriktion* を受け、(意味形式の質料からの規制をカント認識論に於ける所謂範疇の「圖式化」*Schematisierung* になぞらへて考へることも出来ようか)、かくて形式が充實せられ特殊化限定せられて分化し、意味も亦個別化せられ分化せられて具體的となるのである。端的に云つて意味分化従つて意味の形式の分化は、却つて形式の側から生ぜずして、質料の側即ち形式に取つては自分以外の處より生ずるのである。而も意味はどこまでも意味として妥當であり、意味形式は質料からの規制にも拘らず、否規制の故に、質料に適合し自らを超えて之に *hingelien* するのである。意味形式の意義契機 *Bedeutungsmoment* は形式外から生じたものであるけれども、存在するのは形式の中に於いてある。妥當の分化は妥當ならぬものに負ひながら妥當に於いて存するのである。本來妥當に多様性はない。妥當の多様性は妥當ならぬものからの影響である。即ち質料的なるものに依つて妥當は分化するのである。一般に意味形式は意味質料によつて規制せられ充實せられながらその質料に *hingelien* して意味を成し意味を妥當せしめるのである。その場合質料による規制従つて意味充實は、形式に對し質

料が所謂「與へられる」ことに依つて普通可能にされると考へられて居る。併し「與へられるてふこと」即ち *ebenheit*、とは形式が形式だけでは意味内實を成し得ざることに實は別名であつて、そこに意味形式の意味質料による要補足、即ち意味充實を受ける必要性の現はれが見られないこともないのである。

五

さて以上の如き「體驗」或は「直觀」と然らば「認識」とは如何に關係し、また如何に區別せられるであらうか。

「何かを認識する」とは單に何かを體驗してそのもの、體驗だけに踏み止まつて居るのではない。むしろその何かが或理論的意味形式即ち何等かの範疇的眞理形式の中に入れられ、その形式に於いて立ちその形式を具へて居るものとして、かゝる理論的意味そのもの、體驗、かゝる眞理體驗そのものを通して媒介的に體驗直觀せられるのである。従つて何かを認識する場合には、その何かは認識質料として何等かの理論的意味形式（即ち眞理形式若しくは範疇的形式）の中に入れられ、それに包み込まれ、その形式の衣を着せられて、かゝる形式に於いてあるものとして把握せられるのである。故に「何かの認識」を直ちに「何かの體驗」と同一視するわけには行かない。「何かの認識」は「何かの體驗」以上であるか或は以下であるかのその何れかであるとも云へるであらうし、若しくはその何れでもない、それ以外のものであるとも考へられ、またその兩方或はその凡てあるとも考へられないこともない様に思はれる節がある。それはなぜであるか。

ものゝ認識とは、ものゝ範疇的把握即ち概念的把握 *kategoriale Erfassung d. h. Begreifung* と考へられるからである。ものを認識するには、そのものに何等かの認識形式即ち範疇をあてはめ、そのものを質料とする或範疇的眞理即ちそのものに就いての或理論的意味形象を意識に現前せしめ、その意味形象の體驗を通してそのものに謂はゞ概念的に關係するからである。概念的に關係するとは、結局は亦判斷的に關係すること、同じであるが、要するにそれは、

ものに範疇的捺印 *kategoriale Bestiegung* を與へ、即ち範疇の衣を着せ概念の被ひを纏はせてその中に包み取り、かくて範疇質料としてそれを受取り、而もその内容(質料)をかゝる形式を通しかゝる形式に於いてあるものとして謂はゞ廻りくどく *unständig* 捉らへることである。従つてものを此の如く廻りくどく間接的媒介的に「體驗」すると共に、かゝる範疇的認定 *kategoriale Legitimierung* そのものをも共に體驗 *miterleben* するのである。否かゝる認識或は捺印の體驗に於いて、即ちこの體驗を通しこの體驗を媒介にしてものを把握 *ertassen* し之に關係する仕方が、とりもなほさず「認識」といふ把握の仕方、關係の仕方に外ならないのである。

(註) 間接的媒介的「體驗」とは正に形容矛盾である。それは實は所謂「體驗」とは異つた事物の把握の仕方、關係の仕方を意味する。「認識」が「體驗」以上でも以下でもなく、むしろ以外と考へらるべき所以でもあろうか。

或物を認識するとはその物を直接に體驗することゝは異なる。その物に就いての或理論的意味(眞理)の形式を體驗し、この形式の中にその物を質料として包み取り、かくして生ずるその物に就いての或客觀的眞理を把握體驗し、即ちその物に就いての或客觀的事柄 *objektive Bewandnis* を意識に内在現前せしめて之を客體的に捉らへ、この客體の把握を通しこの客體の把握體驗に於いて、間接的媒介的にその物に關係しその物を把握するが之を「認識」することである。知るとはその物のことを知るのであり、その物に就いて知ること (*wissen „um“*) であり、所謂眞理とはその物に關して、その物に就いての眞理 (*„Wahrheit über“*) である。一言にしていふならば、認識とはその物を體驗することではなくして、その物に就いて何かを體驗し、そのものに就いての或事柄を把握體驗することである。即ちものをではなくして、ものゝことを體驗するがもの認識である。認識に於いては體驗されるはことであつてものではない。そこに認識的體驗——認識をも強いて體驗の一種といふことが許されるならば——の特色があるのである。

言ひ換へれば、認識に於いて體驗されるのは、飽くまで認識形式 *Erkenntnisform* 即ち範疇若しくは範疇的意味形式(家であつて、認識内容(認識質料) *Erkenntnismaterial* 即ち範疇質料ではないのである。質料は謂はゞ間接的に斜め

に *in obliquo* 即ち形式に包まれて「體驗」されるだけであつて、即ち所謂それに就いて、そのこと、が體驗されるのみである。故に認識に於いて、認識の形式の體驗即ち範疇形式の體驗若しくは直観（範疇的直観）と同じ意味或は同じレベルに於いて、認識の内容（質料）の體驗若しくは直観即ち範疇質料の體驗若しくは直観（例へば感性的直観の如き）をいふことは、體驗或は直観にフッサールのいふ如き色々の *Ordnung* の相異を認めて始めて可能なることであつて、普通の言葉の使ひ方ではむしろそれは避けらるべき、従つて曖昧若しくは混同を惹き起すおそれのある言ひ方である。認識質料（範疇質料）の體驗と認識形式（範疇形式）の體驗とは、認識そのものに於いては全く異つた次元の體驗と見なければならぬ。否認認識に於いては認識質料は、言葉の正しき意味に於いては、最早「體驗」されるのではないと見らるべきが適當ではあるまいか。何となれば體驗するとは普通にはものを直接に捉らへることであり、裸かの儘のそれにちかに關係することであると考へられるからである。然るに認識に於いてはものは常に質料の位置をとり、従つてそれは何等かの形式（意味形式）に包まれ、その形式に於いてあるものとして、その形式の體驗を通して、捉らへられず、裸かの儘では吾々に捉らへられないからである。

右の事情を今存在認識 *Seinserkennen* に當てはめて考へて見ると、所謂存在認識は單なる感性的體驗以上のもの若しくは以外のものである。従つて普通に所謂存在領域 *Seinsgebiet* と稱せられるものも、單なる感性的或物以上のものでなければならぬのである。

存在するもの *das Seiende* 即ち感性的なるもの *das Sinnliche* を認識するには、吾々は存在するもの若しくは感性的なるものを質料として、之の於いてあり之を存在せしめ感性的たらしめて居るその形式「存在」*„das Sein“* 或は「感性的なること」*„Sinnlichkeit“* を體驗することにより、この體驗を通しこの體驗従つて形式を媒介にして、この形式に包まれたものとして、質料に關係し質料を捉らへるのである。即ち認識は質料を直接に何等の形式を借り

す裸かの儘で捉らへるのではない。即ち體驗するのではなくして、間接に即ち形式の衣を着せてこの衣を纏へるものその形式に於いてあるものとして之を捉らへるのである。それがとりもなほさず質料の「認識」に外ならない。

存在認識も、存在するもの感性的なるものを、直接裸かの儘把握即ち體驗するのではなくして、之を「認識」するのであるから、それを何等かの形式に於いてありこの形式を通して見られる限りに於いて、この形式に包んで捉らへるのである。従つてそれは質料の裸かの儘の把握たる所謂感性的體驗 *das sinnliche Erleben* とは區別されるべきものである。之以上のものであるか若しくは之以外のものであるのである。

存在認識に於いて體驗されるのは、存在するもの、存在すること即ち存在 *das Sein* であつて、存在するもの *das Seiende* そのもの即ち感性的なるもの *das Sinnliche* 自體ではない。後者の體驗即ち存在するもの、體驗従つて所謂感性的體驗は存在認識の質料の體驗として、存在認識に直接の關連はなく、全然無縁ではないかも知れないまでも、少くともこの場合存在認識そのものとは一應區別されるべきものである。存在認識は一種の存在體驗を媒介とする存在するもの、把握であり、その限り一種の存在體驗 *Seinserleben* と稱することは出来るにしても、所謂存在體驗即ち *erleben* とを區別することが出来るとするならば、存在認識は所謂感性的體驗ではないにしても一種の感性的體驗を媒介するものとして感性的體驗の一種と稱することは出来るのであるまいか。何となれば存在認識は感性的なるもの *das Sinnliche* の認識であるが、感性的なるもの、認識とは感性的なるもの、感性的なる所以即ちその感性的なるもの、形式「感性」(「感性的なること」) *Sinnlichkeit* を體驗することに依り、この形式に於いてあるものとして感性的なるものを捉らへ之に關係することであるからである。而して感性(感性的なること)を體驗することが感性的體驗と稱せられるに大して不都合はないであらう。

いふなれば存在認識は、一種の存在體驗ではあるにしても必ずしも存在者の體驗ではない。一種の感性的體驗ではあ

るが、感性的體驗ではない。それは所謂感性的認識即ち感性的なるもの、認識、存在するもの、認識であつても、感性的なるもの、體驗、存在するもの、體驗ではないのである。

更にいふならば、存在するもの das Seiende の認識が所謂存在認識 Seinserkennen と稱せられて、それが一種の存在體驗 Seinserleben に於いて成立すると考へられながら、而もそれが必ずしも存在者 (存在するもの das Seiende) の體驗と同一若しくは直接の繋がりがないと同じ様に、感性的なるもの das Sinnliche の認識が亦感性的認識 Sinnlichkeitserkennen (普通になむ感性的認識 das sinnliche Erkennen) と稱せられて、それが一種の感性的體驗 Sinnlichkeitserleben に於いて成立すると考へられながら、而も必ずしも感性的なるもの、體驗即ち所謂感性的體驗 das sinnliche Erleben と同一若しくは直接の繋がりがあるのではないのである。

約言すれば存在認識は存在體驗に基づき結局存在體驗と同一であるけれども、それは存在者體驗 (存在するもの、體驗) と同一ではない。同様に感性的認識即ち所謂感性的認識は、感性的體驗に基づき結局感性的體驗に歸一するとも考へられるけれども、それが必ずしも感性的體驗 (感性的なるもの、體驗) と同一ではない。存在認識 (存在者の認識) が存在性 (存在すること、das Sein) の體驗ではあつても存在者 (存在するもの、das Seiende) の體驗でない如く、感性的認識は感性的體驗 (感性的なるもの、體驗 das Sinnlichkeitserleben) ではあつても感性的體驗 (感性的なるもの、體驗 das Erleben des Sinnlichen) ではないのである。

普通に所謂存在認識即ち感性的認識は、存在體驗若しくは感性的體驗に基づいて成立し、結局之に歸一するのであるが、さればとてそれが直ちに存在するもの、體驗即ち感性的體驗と同一ではない。何となれば存在體驗或は感性的體驗は、存在するもの或は感性的なるもの、形式——その意味形式或は眞理形式若しくは範疇的形式即ち認識形式——の體驗であつて、その質料の體驗ではないからである。質料も勿論かゝる形式の體驗に於いて「把握」はされる。併し謂はゞ斜めに即ち間接的媒介的に把握されるだけであつて、直接に把握即ち「體驗」されるのではないのである。

所謂思念 *meinen* されるだけである。反之存在するもの、體驗即ち感性的體驗は右の質料そのもの、直接無媒介の把握、即ち形式の媒介を経ずして、かに裸かの儘で之を捉らへることである。認識質料、意味質料、眞理質料、範疇質料を質料自體として、形式を通さず形式の衣を着せず裸かの儘之を捉らへるが存在者、體驗即ち感性的體驗である。

——感性的體驗は又感性的體驗ならぬ感性的者、體驗と稱することも出来よう。——之が即ち文字通り質料の認識ならぬ質料の直接體驗そのものである。然らばかる質料の體驗と質料の認識とは如何に關係するであらうか。

こゝで注意しなければならないのは右の質料體驗の正體に就いてある。

存在認識が單なる感性的體驗 *das bloße sinnliche Dahnenerleben* になく (*Task, Logik d. Philos. S. 80*)、それ以上又は以下若しくは少くともそれ以外のものであることを就いては既に述べた。存在認識は存在するものに關する或意味體驗に基づき、その意味の形式を通し、その形式に於いて、即ちその形式に包まれたる「存在するもの」を捉らへるのであつて、かる形式を離れ、何等の形式に依つても包み被はれざる裸かの儘の質料、謂はゞ質料だけの質料を、かかに捉らへるのではないのである。従つて「存在するもの」「感性的なるもの」に、その「存在すること」(存在)「感性的なること」(感性)に拘はりなくかに、即ちその意味に關係なき單なる直接印象に没入するが如きことではない。少くともそれだけのものではない。それ以上か以下かは分らないにしても、少くともそれ以外の即ちそれとは異つた或仕方^に於いて捉らへられるのである。即ち存在認識に於いては、かる感性的體驗(質料だけの體驗)の外に、この質料「感性的なるもの」に就いての或意味形象の體驗を必要とするのである。存在認識即ち感性的認識は、この「感性的なるもの」をその内容(質料)とする或理論的意味の形式を體驗して、その形式に依つてその内容(質料)を包み (*umkleiden*) 縁入り (*umrandeln*)、之をその意味内實に於いて把握 (*auffassen*) しながら、その意味を妥當なる形象として認定 *legitimieren* する働きが加はり、即ちその内容(質料)たる感性的なるものに「就いての眞理」, *Wahrheit über*、を意識に現はれしめ之を客體として自らの前に持つ (*vor sich haben*) のである。存在認

識が存在するものに就いて知り (wissen „um“) 感性的認識が感性的なるもの、ことを知る所以である。

反之感性的なるものを單なる質料だけとして形式を用ひず把握し、之に就いて („über“ oder „um“) の何事も把握せざる所謂感性的體驗は、その感性的なるものを没入没頭的に捉らへるだけであつて、このものに就いて何等知る所なく、従つてその感性的なるもの、存在 (存在すること) もその實在 (性) Wirklichkeit も、その他そのものに就いての何事も把握 (體驗) せざるが故に、單にそのものを體驗するだけでは、それが有るとも無いとも云ひ得ず、存するとも存せずとも云ひ得ず、眞とも偽とも云ひ得ず、即ち總じてそのものに就いての何等の客觀的眞理若しくは理論的意味は成立せず、若し之が成立するならば、それは既に單なる質料だけの直接體驗でなく、その質料に就いてのその質料を内容とする或意味形式の體驗を伴ふものと見なければならぬ。即ちそれは既に單なる感性的體驗でなくして感性的認識、即ち存在認識でなければならぬのである。

かくて認識は單なる内容 (質料、もの) の體驗ではないのである。その内容に就いての或意味體驗 (こと) の體驗) を含む。否その意味體驗 (従つて意味形式の體驗) を通して内容の把握、即ちその内容に就いての、或こと、或意味、或眞理 („Wahrheit über“) を捕捉體驗することが正に認識である。認識は常に何かに「就いて」の認識と云はれる所以である。認識に際しては「就いて」 „um“ oder „über“ 即ち一種の「廻りくどや」 Umständlichkeit が存するのである。認識されるもの (質料) と認識 (否むしる體驗) されること (意味——意味形式即ち Wahrheit über) とが存する。正確にはもの (質料) は認識されるけれども、こと (意味、形式) は體驗されるのである。即ちことの體驗に於いても、ものが認識されるのである。否ことの體驗を通して、ものが認識される所に、もの、認識が「認識」と稱せられる所以があるのである。ものに就いてのことを體驗することが、ものを認識することであり、もの、認識である。而して正確にはそれは亦ものに「就いて」の認識である。否もの、認識若しくはものを認識するとは、ものに「就いて」の「認識若しくはものに「就いて」認識することより外に存しないのであつて、而もそれ等は結局ものに就いての

或意味體驗、即ちそのものゝこと（そのものに就いての或こと）を體驗することに外ならないのである。そのものゝことを體驗することが、そのものを認識することであり、そのものに「就いて」認識することである。それがやがてそのものを知り、そのものに就いて知り、はたまたそのものゝことを知ることである。

故に認識を一種の體驗と考へれば、簡単に云つて認識なる體驗は或意味體驗である。事物に就いての或理論的意味を體驗することがその事物を認識することである。而してその意味には勿論意味形式と意味質料とが考へられる。認識は謂はゞこの兩方を體驗しなければ成立せずと一應云ふべきであるかも知れないが、併し精密に考へるとむしろ、或意味形式の體驗を通しての或意味内容（質料）の把握（間接的體驗）が認識である。認識に於いては意味形式が直接無媒介的に即ち論理的裸かの儘で體驗されて、その意味質料は、この形式に包まれこの形式體驗に媒介されて、謂はゞ間接的に「體驗」されるに過ぎない、否質料は體驗されるといふよりも唯思念 *meinen* されるだけといふべきでもあらうか。それがとりもなほさず、質料は體驗されずして認識されると稱せられる所以でもある譯である。

六

認識は或物に就いての或事を體驗してこの體驗を介してこの或物を捉らへる。即ちその或物に就いての或意味形象（眞理）の體驗が認識であると考へられた。従つて物は事を通し事に即し事に於いて捉らへられる、事の體驗を介して「體驗」されるのである。その限り物そのものは間接的に捉らへられ間接的に體驗（註）されることになる。この場合の物の捉らへられ方が間接的であるといふこと、即ち認識に於ける物の把握は間接的であるといふことは、如何なることを意味し如何なる事態を指すであらうか。

（註） 間接的に體驗されるとは勿論一種の形容矛盾であること既に注意して置いた通りであるが、然し普通に「直接的體驗」といふ言葉もある以上「間接的體驗」といふ言い方も或點までは許されてよいのではあるまいか。

さてかゝる間接的把握即ち間接的體驗従つて認識を、所謂追體驗 *Nacherleben* と解してはならないと思ふ。即ち物そのものを直接的に體驗する感性的體驗が先づあつて、認識はこの感性的體驗を更に再現的に體驗し直し、あとから最一度追ひかけ體驗することであると解してはならないと思ふ。認識に於ける質料の把握はかゝる追體驗としての原體驗（感性的體驗即ち質料の直接把握）の再認の如きではないと思ふのである。

認識が或物に就いて何事かを捉らへるとは、その物を内容（質料）とする或意味形象の形式を體驗することであつて、その意味形式を體驗することにより間接的にその意味の内容（質料）を思念し、かくてその意味そのものを把握しながら、かゝる意味形式の體驗を通して意味内容（質料）たるその物を、謂はゞ媒介的間接的に把握するのである。而もかゝる間接的把握は、直接その物をではなくして、その物に「就いて」なされる、謂はゞ「まつすぐに」(*directo*)ではなくして「斜めに」(*in obliquo*)なされる把握である。その限り「間接的」と云はれ「媒介的」と云はれるのである。

反之右の如き形式又は形式の體驗の力を借りず、物そのもの即ち内容或は質料をその儘裸かで（*ラスク*の所謂 *logisch nackt* に）把握するを直接的と稱し、所謂感性的體驗は感性的なるもの、かゝる直接的把握と考へられる。但しこの場合にはその内容（質料）は實は内容（質料）と名づくるも當らず、謂はゞ内容（質料）以前のものであつて、後に意味形式の中に採り入れられて始めて内容（質料）と稱せらるべきもの、前身である。かゝるものを内容（質料）となすには、何も別に感性的體驗を追體驗して之を捉らへ直す譯のものではない。感性的體驗に於いて捉らへられたものを、唯内容（質料）として之に就いて、或意味體驗をなし、即ちそのものに就いての或意味形式を體驗して、その體驗を介してそのものに關係するだけであつて、感性的體驗そのものを改めて再現的に最一度體驗し直したり、この體驗に就いてどうかうしたりするといふ譯ではないのである。その點認識に於ける「内容（質料）の把握」は飽くまでも形式を通し「形式の體驗」を介し、それに於いて謂はゞ斜めに (*in obliquo*) なされるだけである。か

る斜めの把握は感性的體驗の追體驗 Nacherleben ではなく、と云はなければならぬ。

認識に於ける内容(質料)の把握が何等かの體驗規定性 Erlebnisbestimmtheit を有しなければならぬとすれば、それはむしろ次の様に考へて一應の「體驗性」をそれに許すことも或は出来るかも知れない。それは、認識質料、意味質料、眞理質料、範疇質料として吾々の前に立つものが、謂はゞ直接體驗から押し除け (abdrängen) られて居る所に認識の間接性が成立するのであるから、認識の客體 Erkenntnisobjekt (認識される事柄——意味、即ち何か) 就いての眞理 „Wahrheit über“ に於いては、質料と體驗との間へ範疇(範疇形式、意味形式)がずり込んで居ると考へられるのである。

或物に就いて或事を認識する際、直接に把握(體驗)されるのは或事である。(而もその形式である。)或物はその或事を通してその形式に於いて捉らへられ思念されるに過ぎず、即ち間接的に(即ち斜めに in obliquo) 把握されるはこの謂である。ものゝ認識がものゝ體驗に比し間接的把握と云はれる所以である。

併し認識に於いては、ものゝ間接的なるも、ことは直接的に把握せられる。この形式としての範疇は直接的に體驗せられ、この形式の體驗を通して、この形式に於いてある所の内容(質料)が把握せられるが故に、この直接的把握を通してものが間接的に把握せられるが、ものゝ認識であるといふことが出来るであらう。

認識に對して質料は、謂はゞそれを直接捉らへんが爲といふよりも、それに就いての或事柄即ち眞理(意味)を捕捉 erfassen せんが爲の、單なる知識の目標として立てられたに過ぎないとも考へられる。認識の生きる leben は眞理に於いてゞあり、即ち理論的意味に於いてゞである。理論的意味を直接的に生きる (leben) ことが、正に範疇的形式が直接的に體驗 erleben されることである。他方質料は間へずり込んで來た範疇(形式)に依つて直接的體驗からは引き退けられ遠ざけられるのである。

存在認識に於ける感性的質料は唯理論的目的の爲に呼び出されたに過ぎない。それは決して直接的感性的に體驗さ

れるのではない。それは生きられる (leben) のではなくして考察されるだけ、それに就いて「語られる」(reden) だけであり、それは唯思念される (gemeint) だけである。故に感性的質料の認識でも、認識は決して感性的體驗ではない、眞理に對する或非感性的態度振舞 Verhalten である。即ちかゝる態度若しくは振舞は、感性的なるものにおける (in) 何等の生 Leben にあらずして、その單なる「認識」に過ぎないのである。

勿論認識自身は或種の體驗即ち直接的生 unmittelbares Leben であるけれども、而もその生は理論的眞理内實に於ける im theoretischen Wahrheitsgehalt 範疇的形式に於ける in der kategorialen Form 生である。(A. o. A. S. 86) 何となればこの範疇的形式は、自らは範疇的に他を包むものとして論理的には裸かであり、範疇的に他から何等別の形式に依つて捉らへられて居ないからである。

併し他方認識は、質料に對する何等かの振舞ではあるにしても、それは質料的成分 materieller Bestandteil としては必ず全認識の中へ這入り込まなければならぬ。何となればその質料を唯考察するだけに引き出すにしても、認識はそれを宛に角自己の前に引き据えなければならぬからである。

かくて認識は質料に對する或振舞の上に築かれては居るけれども、併しこの質料的振舞といふ成分だけを取つても、同じ質料の直接的體驗とは正しく同一ではないのである。

要するに生 (體驗) と認識との對立區別は、前者が論理的裸かの状態に於いてその内容 (質料) に生きて居るに對し、後者はその内容 (質料) を、かゝる生とその内容との間へ割り込む或範疇的形式に依つて直接的生から押し退けられた状態 Entrücktheit (S. 87) に於いて、捉らへて居るに過ぎないといふ相異に基づくのである。

感性的認識即ち所謂存在認識に於いても、その質料「感性的なるもの」が直接體驗されるのではなくして、唯それに就いて把握 darüber erfassen され思念される (gemeint) だけで、従つてそれはたとひ感性的質料の認識ではあつても、感性的質料の體驗即ち感性的體驗ではない。それは感性的なるものに於ける生 Leben im Sinnlichen ではない。

くして、感性的なるものに就いての眞理意味に對する或非感性的態度 unsinnliches Verhalten に過ぎない。唯その理論的意味内實即ち範疇的形式に關してのみ直接體驗 unmittelbares Erleben を云ふことは出来るけれども、之を以つて直ちに其質料（意味質料、範疇質料）に關して即ち das Sinnliche に關して unmittelbares Erleben と同一視してはならない。認識は飽くまでも „Erkennen von“ であり „Wahrheit über“ であり、„Denken in“ 或は „Leben in“ oder „Erleben in“ ではないなり。其の „Leben in“ oder „Erleben in“ と稱せられ得るは、認識の Form 即ち Kategorie に關してのみであつて、その Material に關して言はれるのではないなり。この Leben 或は Erleben と Wissen 或は Erkennen との間の超ゆへからやむを區別と相異若しくはその Gegensatz があるのである。認識の質料も體驗の質料も、質料としては同じであると言はれるかも知れないが、その質料を形式に包み込んで捉らへるか裸かの儘捉らへるかでは、實は同じ質料が謂はるゝその「在り方」を異にする、即ち吾々に對する——といふよりも吾々がそれに對する——關係の仕方を異にすると云はなければならぬ。従つてその質料を認識に於いて捉らへると體驗に於いて捉らへられるとは、その捉らへ方は同じでない。少くとも間接的に捉らへるか直接的に捉らへるか、まとも in recto に捉らへるか斜め in obliquo に捉らへるかの區別が存するのであつて、さてこの區別が然らば何を意味するかは自づからまた別問題であるにしても、兎に角吾々は生或は體驗と認識との間に右の如き區別を認め、その區別に従つて以上の如く認識概念を定めることが出来るであらう。

(一)

(筆者 大阪大學教養部〔哲學〕教授)

of God is a religious absolute, but each has relative validity. Hence the real and most tormenting trouble to Hamlet. It is therefore in the last analysis not a conflict between God and the Devil, as Goddard puts it, but the conflict between God and the world, which buries Hamlet. In other words, the conflict which Shakespeare depicts here is not seen with the eyes of a medieval Catholic, but rather with the eyes of a modern Protestant.

Eine Betrachtung über den Erkenntnisbegriff.

— Ein Blick in die Lasksche Erkenntnistheorie —

von Noriyori Shimasaki.

Erkennen ist Verhalten zum theoretischen Sinn; aber erkannt wird dabei nicht der theoretische Sinn, sondern lediglich dessen Material. Unter Erkennen verstehen wir eine spezifisch theoretische „Inte-lität“, ein Gerichtetsein auf ein von kategorialer Form umfasstes Etwas. Man darf also gar wohl vom Objekt des Erkennens sprechen; nur muss man sich darüber klar sein, dass dabei nicht das Objekt, sondern nur das Objektmaterial das ist, was erkannt wird.

Sich erkennend einem Etwas zuwenden heisst: auf die es umschliessende, es umgeltende Kategorie gerichtet sein. Etwas erkennen also heisst immer: kategoriale Form hinsichtlich oder betreffs seiner vor sich haben, Wahrheit und Klarheit darüber erfassen, der objektiven Bewandnis, die es damit hat, innerwerden, also immer etwas darüber oder darum erleben. Was sprachlich so treffend andeutet ist in solchen Wendungen wie: *um* etwas wissen, *über* etwas reflektieren, sich klar werden.

Denkt man daran, dass der für den Begriff des Erkennens bedeutungsverleihende theoretische Gehalt die Rolle der Form spielt, so ist mit Erkennen die Struktur theoretischen Sinnes, die Umschlossenheit eines Erkenntnismaterials durch kategoriale Erkenntnisform unlöslich verknüpft. Es ist der Hingeltungscharakter der Form, das auch der Redewendung „Wahrheit,-über“ zugrundeliegende Urverhältnis zwischen Form und Material, das sich hier in den Bezeichnungen für die erkennende Subjektivität widerspiegelt.